

國學院大學學術情報リポジトリ

『源氏物語』夕顔の人物形象と漢詩文表現：
伝承性と作為性を視点として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笹川, 勲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001578

『源氏物語』夕顔の人物形象と漢詩文表現

—伝承性と作為性を視点として—

Expression of the Person Figure of the “*The Tale of Genji*” Yougao and the Chinese Classical Literature :

Tradition Characteristics and Artificiality Characteristics as a Viewpoint

笹川 勲

キーワード：『源氏物語』夕顔 人物形象 伝承性と作為性 材源 漢詩文表現

关键词：夕顔、人物形象、继承性与創作性、材源、漢詩文表現

要旨

本稿は、『源氏物語』の作中人物のひとりである夕顔が、どのような方法や材源によって形象されているのかを明らかにしようとするものである。光源氏は夕顔との逢瀬では、素性を明かすことなく通い、夕顔は光源氏とともに訪れた廢院で急死する。これらの表現の基底には、記紀神話等の三輪山型神婚譚や、平安朝に成立した河原院説話が摂取されており、折口信夫の説いた、「伝承性」の濃い「第一次性源氏物語」の部分と言える。一方、夕顔の形象には、「長恨歌」や「任氏伝」の摂取も認められる。共通するのは愛し合う男女が死によって別れた後もなお、残された男は女を追慕するという型である。これらは三輪山式神婚譚では描かれなかった場面である。折口の説く「作為性」に基づいた「第二次性源氏物語」の箇所と考えられよう。『紫式部日記』によれば、紫式部の周囲には、先行する和歌や物語、漢詩文が存在しており、それらの読書経験を物語の執筆に活かしたと考えられるが、ことに漢詩文はすぐれた素養をことさらに記しており、「作為性」の源泉のひとつとして注目に値する。夕顔の人物形象とは、古伝承を基底としつつ、そこから離陸すべく漢詩文に拠った作為を用いたと考えられるのである。

摘要

本文旨在探討《源氏物語》中所描述的主要人物、夕顔的形象是以何種方法及依據何種資料來源塑造的。光源氏和夕顔所建立的情人關係，並非是兩人在相互了解對方之後，夕顔在和光源氏在廢棄的庭院中幽會時猝死。這些描述、引用折口信夫的考證，可以追溯到記紀神話及三輪山神婚譚，以及成立於平安時期的河原院傳說，可以稱為具有較強繼承性的第一次性源氏物語。另外，夕顔的形象的塑造，也吸取了《長恨歌》及《任氏傳》中的元素。作品的共通之處為相愛的男女在經歷生死離別後，活下來的男人或女人對其愛人的追思和回憶。這些情節在三輪山神婚譚中未曾提及的。引用折

口信夫の説法、这种创作性的写作方法即可称为二次性源氏物语。在《紫式部日记》作品中，紫式部的周围充满了可以接触新的和歌以及物语、汉诗文的机会，以积累的这些素材作为物语创作源泉，再辅之以高超的汉诗文化素养，可以称得上是备受瞩目的创作性源泉。本文将论证夕顔的人物形象，是继承了古代的说故事并添加了汉诗文中所蕴含的文化元素塑造而成

序

『源氏物語』の作中人物夕顔は、彼女を女主人公とする「夕顔」巻において印象深く語られる女君である。光源氏にとって夕顔は、若き日の恋情と悔悟とを想起させる存在として、永く追憶の対象となっている。本稿では、折口信夫の説いた、『源氏物語』の伝承性と作為性の視点から、夕顔という作中人物を形象する方法や材源について明らかにしたい。特に漢詩文に由来する表現の作為性について、伝承性とのかわりから、その意義を述べたい。

1. 夕顔の人物形象と伝承性

本節では、夕顔が平安朝以前からの伝承や神話、あるいは平安朝に発生した説話を摂取することで、どのような人物として形象されてきたのかを考察する。

(1) 素性を隠しての逢瀬

夕顔と光源氏との出会いは、都の場末五条においてである。自らの乳母を見舞った光源氏は、その傍らにある軒先に夕顔の蔓の絡まる家に目を留める。従者の惟光を介して、この家の下仕えの少女から白い夕顔の花と扇を贈られた光源氏は、扇に書きつけられた和歌から、和歌を贈った女に興味を抱き、惟光の手引きでこの女、つまり夕顔の許に通うようになる。しかし、その逢瀬は常の逢瀬とは異なるものであった。

①女、さしてその人と尋ね出でたまはねば、我も名のりをしたまはで、いとわりなくやつれたまひつつ、例ならず下り立ち歩きたまふはおろかに思されぬなるべしと見れば、わが馬をば奉りて、御供に走り歩く。……人に知らせたまはぬままに、かの夕顔のしるべせし隨身ばかり、さては顔むげに知る

まじき童ひとりばかりぞ率ておはしける。もし思ひよる気色もやとて、隣に中宿をだにしたまはず。②女も、いとあやしく心得ぬ心地のみして、御使に人を添へ、暁の道をうかがはせ、御あり処見せむと尋ぬれど、そこはかたなくまどはしつつ、さすがにあはれに、見ではえあるまじくこの人の御心に懸りたれば、便なく軽々しきことと思ほし返しわびつつといしばしばおはします。
 (『夕顔』①151～152頁)⁽¹⁾

傍線部①で夕顔の素性を尋ね出すことのできなかった光源氏は、自分も名乗ることをせず、身分不相応に粗末な装束をまとい、わずかな従者のみで夕顔の許に通う。一方夕顔も、傍線部②で光源氏の素性を隠しての通いをいぶかしみ、文を持参した従者の帰り道を付けさせるものの、はぐらかされ、どこの誰なのかわからないまま、両者の関係は進むことになる。

いとことさらめきて、③御装束もやつれたる狩の御衣を奉り、さまを変へ、④顔もほの見せたまはず、夜深きほどに、人をしづめて出で入りなどしたまへば、⑤昔ありけん物の変化めきて、うたて思ひ嘆かるれど、人の御けはひ、はた、手さぐりもしるきわざなりければ、誰ばかりにかはあらむ、なほこのすき者のしいでつるわざなめりと大夫を疑ひながら、せめてつれなく知らず顔にて、かけて思ひよらぬさまにたゆまずあざれ歩けば、いかなることにかと心得がたく、女方も、あやしう様違ひたるものを思ひをなむしける。

(『夕顔』①153頁)

傍線部③、④においても、光源氏はやはり粗末な装束で、顔を見せることもなく、深夜、人の寝静まった頃合いを見て、夕顔の許に通っている。夕顔は傍線部⑤「昔ありけん物の変化めきて、うたて思ひ嘆かるれど」と、光源氏のことをひどく気味の悪いものと思い、心穏やかではない。ここで傍線部⑤に注目したい。夕顔と光源氏との顔を見せないまま進展する逢瀬について、十四世紀後半に成立した『源氏物語』の注釈書『河海抄』⁽²⁾は、「むかしありけむもの、へんけめきて」と見出しの本文を立て、注釈の中で「三輪明神者倭迹々日百襲姫命也／日本紀の心はおほものぬしの神の妻也しかるをその神ひるはみえすし

(1)『源氏物語』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）による。傍線等は引用者。

(2)『河海抄』の引用は、玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店）による。改行は／に改めた。ルビは省略した。

て夜きたるやまと、ひめのみこと夫にかたりていはくきみつねにひるはみえずあきらかにみかほをみることなし」と、説いている。この注釈の典拠となっているのは、『日本書紀』崇神天皇紀に載る、三輪明神（大物主神）と倭迹迹日百襲姫命との伝承である。

倭迹迹日百襲姫命は大物主神の妻となったものの、夫は昼訪れることはなく、夜にのみ通ってきた。倭迹迹日百襲姫命は夫に、「君常に昼は見えたまはねば、分明に其の尊顔を視ること得ず。願はくは暫留りたまへ。明旦に、仰ぎて美麗しき威儀を覩たてまつらむと欲す」⁽³⁾と、いつも昼間はいないのでお顔をはっきり見ることができない。お願いだから夜が明けてもしばらくいていただきたい。明朝、あなたの美しいお姿を拝見したいと申し出る。大物主神は、「言理灼然なり。吾明旦に汝が櫛篋に入りて居らむ。願はくは吾が形にな驚きましそ」と、妻の言い分を道理であると承諾し、明朝、あなたの櫛篋の中にいる。お願いだから私の姿に驚かないで欲しいと請う。倭迹迹日百襲姫命は夫の言葉を訝しみつつ、明朝、櫛篋を開けると中にいたのは衣の下紐ほどの大きさをした美しい蛇であった。倭迹迹日百襲姫命が驚いて叫び声を挙げると、蛇は人の形に姿を変える。この蛇こそ大物主神の正体だったのだ。大物主神は妻に向かって、「汝忍びずして吾に羞せつ。吾還りて汝に羞せむ」と、蛇身に耐えられず声を上げた倭迹迹日百襲姫命に恥をかかされたと言いきり、今度は逆にお前に恥をかかせてやると言って、御諸山（三輪山）へと去って行ってしまった。倭迹迹日百襲姫命は悔いて局所を箸で突いて自害した、というのが伝承のあらましである。

また『河海抄』には、「先代旧事本紀曰」と、崇神紀と並んで『先代旧事本紀』地祇本紀の伝承が今一つの典拠として引かれている。この伝承は活玉依姫と大己貴神（大物主神の異名）との物語である。神である男は女の許に密に通い、女は身籠もる。女の両親は男の姿を突き止めようと、男の衣に糸を通した針を刺しておく。翌朝、糸を辿ると三諸山へと続いており、両親は男が大己貴神であったことを知ることになった、という物語である。この二つは「三輪山式神婚譚」と呼ばれる伝承である。この伝承は「神または神の子が正体を隠し、人間の乙女に通っていたがその素性を暴かれ、永遠の別れを余儀なくされるとい

(3)『日本書紀』の引用は、日本古典文学大系（岩波書店）の訓読文による。

うモチーフの物語」⁽⁴⁾を指す。『源氏物語』では特に夕顔の物語や人物形象への摂取について、先行研究が積み重ねられている伝承である。⁽⁵⁾しかし、夕顔の死は後述するように倭迹迹日百襲姫命のように自ら命を絶ったものではないし、離別して後に残されたのは倭迹迹日百襲姫命や活玉依姫にあたる夕顔ではなく大物主命にあたる光源氏、つまり男の側である。三輪山式神婚譚は、夕顔の物語や人物形象に摂取されていることは間違いないものの、「素性を隠しての逢瀬」という筋立てにのみ活かされていると考えられるのである。

(2) 廢院での逢瀬と女の急死

ここでは、三輪山式神婚譚とは異なる伝承の摂取を検証する。夕顔との男女の仲の深まった光源氏は、八月十五日の夜、夕顔を「なにがしの院」という、今は誰も住んでいない荒れ果てた邸へと誘い出し、二夜にわたって夕顔との歡樂を尽くす。しかし十六日の宵を過ぎた頃、物語は急変する。

御枕上にいとをかしげなる女ゐて、「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつられ」とて、この御かたはらの人をかき起こさむとすと見たまふ。物に襲はるる心地して、おどろきたまへば、灯も消えにけり。…この女君いみじくわななきまどひて、いかさまにせむと思へり。汗もしとどになりて、我かの気色なり。…ただこの枕上に夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。昔物語などにこそかかることは聞け、といとめづらかにむくつけけれど、まづ、この人いかになりぬるぞと思はず心騒ぎに、身の上も知られたまはず添ひ臥して、「やや」とおどろかしたまへど、ただ冷えに冷え入りて、息はとく絶えはてにけり。

(「夕顔」①164～167頁)

夢うつつの光源氏は、枕上に美しい女の姿を認める。女は、「私がつたいそう

(4) 林田孝和項目執筆「三輪山式神婚譚」(林田他編『源氏物語事典』大和書房)。

(5) 高崎正秀「源氏物語『夕顔』の成立—三輪山式神婚説話の系譜—」(高崎正秀著作集第6巻『源氏物語論』、桜楓社、1971年)、後藤祥子「三輪・葛城神話と『夕顔』「末摘花」」(『源氏物語の史的空間』、東京大学出版会、1986年)、藤井貞和「三輪山神話式語りの方法—夕顔の巻」(『源氏物語論』、岩波書店、2000年。初出1978年11月)など。

ご立派な方と拝見している方を尋ねようともお思いにならず、このようなどうということのない方を連れていらっしやって懇ろになっていらっしやるのが、たいそう不愉快で恨めしいこととございます」と、光源氏を語る。物の怪に襲われる心地がした光源氏が目を覚ますと、灯りは消えており、傍らの夕顔は汗もしとどにひどく震えている。やがて女の姿は消え失せる。夕顔の安否に胸騒ぎを覚えた光源氏は寄り臥して声を掛け、起こそうとしたが、夕顔の体は冷え切っており、既に息絶えていたのであった。この場面で光源氏は、物の怪と思しき女が夕顔を襲ったことを傍線部のように述懐している。『河海抄』の加注によれば、傍線部には宇多法皇とその愛人京極御息所との説話が摂取されている。

宇多法皇と京極御息所は、同車して河原院という無人の邸を訪れ、歓楽を尽くしていると、かつて、河原院を所有していた源融の霊が現れ、法皇に御息所を求める。むろん、法皇は拒否するが融の霊は御息所の腰を抱くと、御息所は前後不覚に陥る。河原院から帰った後、法皇が浄蔵法師に加持をさせると、御息所は生き返った、というのが伝承のあらましである⁽⁶⁾。夕顔が死んでしまうのに対して、京極御息所は生き返るという違いはあるものの、廃院での逢瀬と妖物との遭遇という伝承をふまえて語られていることは、明らかなことと思われる。一方で、夕顔に取り憑いた物の怪が、河原院説話にある源融のような、邸に憑いた霊物であると同時に、物の怪の発した言葉から、「夕顔」巻頭に「六条わたりの御忍び歩き」(①135頁)と示唆される六条御息所の生き霊であるかのように形象されてもいる。この点については後述する。

このように物語の表現を確認していくと、夕顔は、三輪山式神婚譚や河原院説話のような、『源氏物語』以前に流布していた神話や説話といった伝承を綴り合わせて形象されたもののように思われる。しかし、夕顔の形象は、それによってのみなされたものではないとも言える。これらの伝承では、女が息絶えたところ、あるいは生き返ったところで話の展開は終わっていると言ってよい。一方夕顔の物語は、その後も光源氏の追慕として語られている。「末摘花」巻頭では「思へどもなほあかざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど思し忘

(6) 時代は『源氏物語』より降るが、『江談抄』巻三・第二七段にも同趣の伝承が載る。

れず」(①二六五頁)、「玉鬢」巻頭では「年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔をつゆ忘れたまはず」(③八七頁)と、夕顔は長く光源氏の記憶に留まり続け、忘れ得ぬ女として回想されている。夕顔の物語を天人女房譚の展開⁽⁷⁾の中で説明することも可能なことと思われるが、それでは『源氏物語』を古伝承や説話、昔話の類型から離陸させることにはならないように思われる。そこにこそ物語作者紫式部の作為がはたらくことになるのではないだろうか。

2. 『源氏物語』の伝承性と作為性

折口信夫に、「日本の創意」と題する論考がある⁽⁸⁾。1944年頃に書かれたとされる草稿の段階で残されたもので、副題に「源氏物語を知らぬ人々に寄す」とあるように『源氏物語』について書かれたものである。この論考で折口は『源氏物語』の作品形成について、

私は、この物語を耽読するあまり、読み方の上に、色々な目安をつくつて居る。その成長の過程を準拠にして、単純な所からはじめる方法の一つに、第一次性源氏物語、第二次性源氏物語といふ名目をつくつてゐる。／此第一次性源氏物語といふにあたるものは、著しく、伝承色彩の多いものであつて、源氏の現行文章の間に、其が窺はれる。其が、第二次の成長期に入つて、大いに飛躍したらしいのである。／併し、第一次の作物が、何の巻々、第二次が何の巻々といふ風に、痕跡を残してゐるのなら、世話はないが、さうは事實は、易々とは行かぬのである。一卷の中に、第一次・第二次が、層々重りあうてゐるのだから、此層を一つ一つはがして見ぬことには、之を認める訣には行かぬ。此能力は一に、経験にかゝつてゐるのだから、むづかしい訣である。／かうした、小説の第一層と、第二層とを分つ準拠となるものは、伝承性と、作為性とにある。… (264頁)

と、述べている。周知のように、折口は日本文学の表現に、伝承や古代の習俗、信仰といった文字化される以前の事象を見出そうとした。『源氏物語』を考察

(7) 竹内正彦項目執筆「天人女房譚」(注(4)前掲書)参照。

(8) 折口信夫全集第十五巻(中央公論社、1996年)。改行は／に改めた。

するにあたってはその視点を持しており、それらを「第一次性」、「第一層」あるいは「伝承性」といった言葉で捉えようとしている。留意したいのは「第二次性」、「第二層」あるいは「作為性」といった言い回しである。前者については、折口の学統に連なる研究者によって考察が積み重ねられ⁽⁹⁾、今日では先行する詩歌や物語などに同じく、『源氏物語』に摂取された伝承は引用の範疇として理解されているとあってよい。しかしながら後者についてはいまひとつ不分明な感が否めない。

折口は「伝承性」と「作為性」の説明として、先に採り上げた廃院の妖物を例としている。それによれば、前掲した河原院伝承を踏まえつつ「第一次性源氏物語の立ち場から見ると、此は恐らくこの古屋敷の精霊なのであらう」と、廃院の妖物の本質を指摘しつつ、「其を土台として、第二次の源氏に書き改められた際に、此女が、源氏に当面の関係を持った女のやうに合理化せられ、又さやうに思はせるやうに見せかけられたものであらう」（二六九頁）と、廃院の妖物が、六条御息所の生き霊であるかのように書きなされていることを指摘している。

言うまでもなく六条御息所は作中人物であり、その背後には生み出した作者の存在がある。折口の発想を拡げるならば、伝承性と作為性の濃淡こそあれ、素材となった伝承と、伝承を物語という文藝へと離陸させる作為およびその背後にある作者との関係は、『源氏物語』と他の物語との間で、さほど隔たりはないであろう。しかし、他の物語と『源氏物語』とで明確に分かたれる点もある。はっきりとした相貌をもつ作者の存在である。

一般的に物語は明らかな作者を持たない。その例外が『源氏物語』である。『源氏物語』とは別の作品である『紫式部日記』には、「御冊子づくり」の段と呼ばれる以下の条りがある。

入らせたまふべきことも近うなりぬれど、人々はうちつぎつつ心のどかならぬに、御前には、御冊子づくりいとなませたまふとて、明けたてば、まづむかひさぶらひて、いろいろの紙選りととのへて、物語の本どもそへつつ、

(9) 林田孝和項目執筆「作為と伝承」（秋山虔編『源氏物語必携Ⅱ』学燈社、1982年）、小林茂美項目執筆「伝承」（秋山虔編『源氏物語事典』学燈社、1982年）、森野正弘項目執筆「伝承」（注（4）前掲書）を参照。

ところどころにふみ書きくばる。かつは綴ぢあつめたむるを役にて、明かし暮らす。 (167~168頁)⁽¹⁰⁾

実家に下がっていた紫式部の主人中宮彰子が、夫君一条天皇の許に帰る際、彰子は「御冊子」を作らせる。仕える女房たちは、色とりどりの料紙を調達し、「物語」の原本や依頼状とともに、書き写す者の許に配っていることが語られている。その中であって紫式部は、写し上がった物語を製本、整理する役割を担っている。ここでの「物語」とは、『源氏物語』であると考えられており、紫式部が中心になって「御冊子づくり」が進められていることから、この場面は、紫式部を『源氏物語』の作者であるとする根拠の一つとされている⁽¹¹⁾。歴史的事実としての作者を作品研究に直結させることは、慎重であるべきだが、近時の『源氏物語』研究においては、紫式部の名は作者の署名として機能するのみならず、その名の下に産出され続けてきた種々の言説を、読者へと送り届ける機能を果たしていること⁽¹²⁾、あるいは物語作者紫式部とは、テキストの内部と外部との境界を占めるとして、その思考や表現を『源氏物語』や『紫式部日記』、『紫式部集』とともに考察することの有効性が主張されている⁽¹³⁾。これらの見解を踏まえるならば、『源氏物語』とは、匿名の作者によって著された他の物語に比して、作者とされる紫式部の「個性」や「創意」といった概念を汲み取りうるテキストであると言える。本論では『紫式部日記』にある以下の条りから、紫式部の「創意」を読み取ってみたい。

内裏のうへの、源氏の物語人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ読みたまへけれ。まことに才あるべし」と、のたまはせけるを、… (208頁)

(10) 『紫式部日記』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）により、本文を一部改めた。

(11) 土方洋一「物語を書く〈私〉—〈紫式部〉というテキスト—」（『研究講座 王朝女流日記の視界』、新典社、1999年）や陣野英則「紫式部という物語作者—物語文学と署名—」（『源氏物語の語声と表現世界』、勉誠出版、2004年）は、『紫式部日記』における「物語」への叙述から、『紫式部日記』という作品が、『源氏物語』という別の作品についての作者の署名として機能していると論じている。なお、石井洋二郎『文学の思考—サント・ブーヴからブルデューまで』（東京大学出版会、2000年）第二章の「作者」概念は、本論とも通じるものである。

(12) 安藤徹「『源氏物語』のパラテキスト」（『源氏物語と物語社会』、森話社、2006年）。

(13) 高橋亨「物語作者のテキストとしての紫式部日記」（『源氏物語の詩学—かな物語の生成と心的遠近法』、名古屋大学出版会、2007年）。

紫式部が、「内裏のうへ」、一条天皇から「この人は日本紀を講義なさるのがよい。ほんとうに漢学の知識があるようだ」と賞讃された場面である。ここで注意すべきなのは、天皇の賞讃が、二重傍線を付したように、「源氏の物語」、つまり『源氏物語』の読後感としてあることである。この条り以外にも『紫式部日記』には、自らの漢詩文の素養（〈漢才〉）に言及した場面は少なくないが、室伏信助は天皇の賞讃が『紫式部日記』に書き記されたことについて、『源氏物語』への高い評価が、漢籍の知識に裏付けられていることを、どうしても書いておきたかったことを強調する条りであると指摘する⁽¹⁴⁾。論者はこの見解を是とし、かつ、紫式部の漢籍についての深い知識が、『源氏物語』を、女性の消閑の具から、男性貴顕の鑑賞に堪えるテキストへと飛躍させたことになったと考える。物語の材源と方法を視点とするならば、前節で検討した、日本在来の神話や説話といった伝承性の濃い、古代的な材源に対して、紫式部の創意に根ざした作為性の強い、日本在来ではないという点で、近代的といえる材源として、漢詩文が対置されると言えよう⁽¹⁵⁾。

それでは、漢詩文に根ざした紫式部の作為性は、「夕顔」巻においてどのように表出しているのだろうか。本文に立ち返って考察したい。

3. 夕顔の人物形象と作為性としての漢詩文表現

夕顔との仲が深まった光源氏は、次のように夕顔をかき口説く。

「いざ、いと心やすき所にて、のどかに聞こえん」など語らひたまへば、「なほあやしう。かくのたまへど、世づかぬ御もてなしなければ、もの恐ろしくこそあれ」といと若びて言へば、げにとほほ笑まれたまひて、「げに、いづれ

(14) 室伏信助「紫式部日記における源氏物語―「ころみに物語をとりて見れど見しやうにもおほえず」をめぐって―」（『王朝日記物語論叢』、笠間書院、2014年）。

(15) 渡辺秀夫は「『竹取物語』を読みなおす“神仙ワールド”の復元的共有」（第三十四回和漢比較文学学会大会 2015年9月13日・於 関西大学）の発表資料において、『竹取物語』の古層には、「古伝承、口頭・オーラルの物語る世界、民間・民衆」といった日本在来の材源がある一方、新しい材源とその享受者として「中国渡来小説・神仙譚、書記・エクリチュールの世界、貴族・知識官人」の存在を主張している。両者の関係は、折口の説く『源氏物語』の「伝承性」と「作為性」とも通底すると言えよう。

か狐なるらん。ただはかられたまへかし」となつかしげにのたまば、女も
いみじくなびきて、さもありぬべく思ひたり。

〔夕顔〕①154～155頁)

くつろげる場所で、ゆったりとお話申し上げたいと、光源氏は彼女を誘う。
しかし、相手がまだこの誰ともわからぬ夕顔は、ふつうではないおもてなし
が恐ろしゅうございませと、光源氏に訴える。それを聞いて光源氏は、傍線部
で「どちらかが狐だろね」と答える。『河海抄』は傍線部について、

狐^レ仮^レ女^ノ妖^ヲ害^シ猶^シ浅^シ一朝一夕^ニ迷^{ハス}人^ノ眼^ヲ女^ノ為^レ狐^ノ媚^ヲ害^ス則^シ深^シ
日^ニ長^シ月^ニ長^シ長^シ溺^{ラス}人^ノ心^ヲ 白氏文集 古塚狐^ノ名山記^ニ曰^ク狐^ノ者先古
之淫婦也其名^ヲ曰^ク紫化^ト而^レ為^ル婦^ト故^ニ名^ヲ自^ラ称^ス阿紫^ト／玄中記曰五十
歳狐^ノ淫婦^ト百歳^ノ狐^ノ美女^ト又^レ為^ル巫^ノ神^ト／抱朴子曰玉荣記曰狐及^レ
狸狼皆寿八百歳満^レ三百^ニ暫^ク變^テ為^ル人形^ト／帝王系図云欽明天皇御宇參
河国狐成^レ人妻^ト云々／水鏡ニモ此事あり／さすなへにゆわかせるもちえ
つの〔真本いちえつの〕ひはしよりくるきつにあふせん^{万葉}／夜もあけはきつに
はめなてくたかけのよふかく鳴てせなをやりつる^{伊勢物語}
(不本またきに)

と、狐の変化について記した和漢の書物を典拠として挙げる。その中で傍線を
付したのは、「艶色を誡むるなり」という副題をもつ、白居易の新樂府「古塚狐」
である。この詩では、狐の変化した女妖に色香の害を説くとともに、人間の女
の色香に迷う害はそれ以上だと詠っている。光源氏が素性も知れぬ夕顔との逢
瀬に溺れていったことの不穩さについて、発想の一端となっていることは否定
できないと思われるが、「古塚狐」以上に、夕顔の形象に摂取されたと考えら
れているのは、沈既済の伝奇小説「任氏伝」である。

『任氏伝』は狐の女妖である任氏と、鄭という男、その妻のいとこである韋
崙とを主要な登場人物とする物語で、特に任氏と鄭との暮らしの一部始終をそ
の主題とするものである。平安朝の日本には、白居易がこの物語を韻文に仕立
て直した「任氏行」とともに渡来していたとされ、『源氏物語』に先行する詞
華集である『千載佳句』⁽¹⁶⁾に、

燕脂漠々桃花浅 青黛微々柳葉新 任氏行／白（「美女」）

(16)『千載佳句』の引用は、国立歴史民俗博物館蔵本の影印（臨川書店）による。

王爪蒼鷹雲際滅 素牙黄犬草頭飛 任氏行（「遊獵」）

と、摘句が残る。『源氏物語』以後に成立した大江匡房の「狐媚記」にも、「嗟乎、狐媚の変異は、多く史籍に載せたり。殷の妲己は、九尾の狐と為り、任氏は人の妻と為りて、馬嵬に到りて、犬のために獲られき」⁽¹⁷⁾と引かれている。「夕顔」巻における「任氏伝」の撰取については、新聞一美に詳細な考証と研究⁽¹⁸⁾がある他、高橋亨⁽¹⁹⁾も「『夕顔の巻の表現がもつ、怪談としての構成のみごとさや高度に完成された手法も、『任氏伝』のような漢文作品の伝統をふまえていると考えることによってのみ説明がつくであろう」と、「任氏伝」の撰取を評価している。「任氏伝」と「夕顔」巻の表現との逐条的な対応については、新聞の考証に多くを譲りたいが、任氏と夕顔の最期については比較考察しておきたい。

「任氏伝」の作者沈既済は任氏を評して、「嗟乎、異物之情也。有_レ人道_ニ焉、遇_レ暴_ニ不_レ失_レ節、徇_レ人以_至死。雖_レ今婦人_ニ、有_レ不_レ如_レ者一矣」(三六九七頁)⁽²⁰⁾と述べ、任氏は異類であっても人倫を有している。暴力に遇っても貞節を失うことなく、思う人に従って命を落としたというのは、現今の婦人であっても及ばないものがあると讃えている。夕顔もまた光源氏によって、「世になくかたはなることなりとも、ひたぶるに従ふ心はいとあはれげなる人と見たまふ」(「夕顔」①一五五頁)と評されている。ともに男に対して従順な性質であり、両者の最期について新聞は「従順と死」と言い表している。夕顔は光源氏に従って廃院に赴いて妖物にとり殺された。任氏は鄭氏の出張のためらった末に同行し、以下のような最期を迎える。

…信宿、至_レ馬嵬。任氏乗_レ馬居_ニ其前_ニ。鄭子乗_レ驢居_ニ其後_ニ。女奴別乗。
又在_ニ其後_ニ。是時西門圜人教_ニ獵狗於洛川_ニ。已旬日矣。適值_ニ於道_ニ。蒼犬

(17)「狐媚記」の引用は、日本思想大系『古代政治社会思想』（岩波書店）の訓読文による。
 (18)新聞一美①「もう一人の夕顔―帚木三帖と任氏の物語―」、②「夕顔の誕生と漢詩文―「花の顔」をめぐる―」、③「日中妖狐譚と源氏物語夕顔巻―任氏行逸文に関連して―」（『源氏物語と白居易の文学』、和泉書院、2003年。初出①1982年5月、②1985年10月、③1989年3月）。
 (19)高橋亨「夕顔の巻の表現―テキスト・語り・構造」（『物語文芸の表現史』名古屋大学出版会、1987年、277頁）。
 (20)「任氏伝」の引用は、『太平広記』（中華書局本）による。新釈漢文大系（明治書院）を参照して訓点を付し、俗字を改めた。

騰出_二於_一草間_一。鄭子見_レ任氏歎然墮_二於_一地_一。復_二本形_一而南馳_上。蒼犬逐_レ之。鄭子隨走叫呼、不_レ能_レ止。里餘、為_二犬所_一獲。

任氏は、草陰から飛び出してきた獵犬に襲われて狐の正体を現し、ついには獲物となって殺される。注意したいのは、その場所が「馬嵬」とあることである。ここで読者は、馬嵬で命を絶たれたもうひとりの女性を想起することになる。言うまでもなく楊貴妃である。楊貴妃の最期は「長恨歌伝」⁽²¹⁾に、

…天宝末兄国忠、盜_二丞相位_一愚弄_二国柄_一。及_二安禄山引_レ兵嚮_レ闕、以_レ討_二楊氏_一為_レ辭。潼関不_レ守。翠花南幸出_二咸陽道_一。次_二馬嵬亭_一、六軍徘徊持_レ戟不_レ進。從官郎吏伏_二上馬前_一、請_二誅_レ錯以謝_二天下_一。国忠奉_二釐纓盤水_一死_二於道周_一。左右之意未_レ快。上問之。当時敢亦言者、請_二以_レ貴妃_一塞_二天下之怒_一。上知不_レ免。而不_レ忍見_二其死_一。反_レ袂掩_レ面使_二牽而去_一。蒼黃展軔、竟就_レ絶_二於尺組之_一下。

とある。従兄弟である楊国忠の専横に、節度使の安禄山が叛乱を起こし、玄宗や楊国忠ともども楊貴妃は長安から落ち延びる。その途次、馬嵬の地で行軍が停まり、兵士をはじめ天下の怒りを鎮めるため、玄宗から死を賜っている。楊貴妃と任氏はともに馬嵬で非業の死を遂げている。『源氏物語』以後に編まれた和歌と漢詩句の詞華集である『新撰朗詠集』⁽²²⁾には、

写得楊妃湯後鬢 写し得たり楊妃の湯の後の鬢
模成任氏汗來脣 模し成せり任氏が汗の来る脣

の摘句が収められる。この句では「楊妃」、即ち楊貴妃と任氏とが対になっているが、句の作者である源英明は『源氏物語』に先行する詩人・歌人であり、紫式部以前、既に楊貴妃と任氏を同一視する発想のあった証左と思われる。先行研究においても土方洋一⁽²³⁾は楊貴妃と任氏との結びつきを重視し、光源氏と夕顔との恋愛譚は、「任氏伝」と「長恨歌」や「長恨歌伝」との連関から、桐壺帝と桐壺更衣の恋愛譚をも踏まえる一方、先に確認した三輪山型神婚譚を

(21) 「長恨歌伝」の引用は、金澤文庫本の影印（勉誠社）による。新釈漢文大系を参照して、訓点を付した。

(22) 『新撰朗詠集』の引用は、和歌文学大系（明治書院）による。

(23) 土方洋一「夕顔の女と物語の生成」（鈴木日出男編『人物造型からみた『源氏物語』』（『国文学 解釈と鑑賞』別冊、至文堂、1998年5月）。

も摂取しつつ、その結末の雛型を河原院説話に求めている。しかし、夕顔という女君が、死後も長く光源氏の記憶の中に生き続け、追慕の対象となっていることを考えると、その結末の材源を河原院説話に求めることはふさわしいとは言いがたい。光源氏と夕顔との恋愛譚の結末は、光源氏の夕顔への尽きせぬ想いを強調するのがふさわしいのではないだろうか。

八月十五夜、光源氏は夕顔の許を訪い、一夜を過ごす。翌朝早く、また鶏も鳴かぬ内から聞こえる御岳精進らしき老人の勤行の声を聴きながら、光源氏は夕顔に語りかける。

「かれ聞きたまへ。この世のみとは思はざりけり」とあはれがりたまひて、
優婆塞が行ふ道をしるべにて来む世も深き契りたがふな
長生殿の古き例はゆゆしくて、翼をかはさむとはひきかへて、弥勒の世をか
ねたまふ。行く先の御頼めいとこちたし。

前の世の契り知らるる身のうさに行く末かねて頼みがたさよ
かやうの筋なども、さるは、心もとなかめり。

〔夕顔〕①158～159頁)

来世を願う老人の勤行にかこつけて、光源氏は「優婆塞が…」の歌を夕顔に詠み掛け、「来む世も深き契りたがふな」と、来世までもわたる愛を契り交わしている。傍線部では語り手が光源氏の心内を推しはかっているが、『河海抄』は、

七月七日長生殿夜半無_レ人私語^{セシ}時在_レ天願^{クハ}作_レ比翼ノ鳥_ト在_レ地為_レ連
理ノ枝_ト 長恨歌

と加注している。言うまでもなく、「長恨歌」末尾の一節、七夕の夜に玄宗と楊貴妃が長生殿において永遠の愛を誓った条りであるが、光源氏は「長生殿の古き例」つまり、「長恨歌」を不吉なものとして退け、「弥勒の世をかねたまふ」と、弥勒菩薩が出現するという遠い未来にもわたる愛を大仰なまでに誓っている。一方夕顔は、光源氏への返歌に「行く末かねて頼みがたさよ」と、この恋路の行く末に不安を抱いていることを詠んでいる。まるで自らの最期を暗示するかのような詠みぶりである。ふたりの贈答は、「長恨歌」を避けていながら、かえって物語に「長恨歌」の結末を引き込んでいよう。「長恨歌」の末尾を、今少し長く引いてみたい。

七月七日長生殿、夜半無_レ人私語時、在_レ天願作_二比翼鳥_一。在_レ地願為_二連理枝_一。天長地久有_レ時_レ盡。此恨綿々無_二絶期_一。

「長恨歌」は、「天長く地久しくも尽くる時有り。此の恨み綿々として絶ゆる時無し」という、永遠の愛の誓いで結ばれる。先に挙げた夕顔を追慕する光源氏の想いと通底するものといってよい。伝承性の濃い材源では描かれていなかった、あるいは描くことの出来なかった物語や人物の形象は、漢詩文に拠った、紫式部の作為性の強い表現によってなしえたと考えられるのである。

結

本稿では『源氏物語』の作中人物である夕顔の形象を、折口信夫の説いた「伝承性」と「作為性」の観点から考察してきた。折口によって先鞭を付けられた、「伝承性」を重視する方法を採る『源氏物語』研究は、平安朝以前の伝承や習俗、あるいは文字化されていない事象を材源としていることを、物語の表現から見出そうとする傾向が強い。しかし『源氏物語』は、平安朝が始発しておよそ二世紀を経過した後に成立したとされる作品である。平安朝の初頭は漢詩文が大いに流行した時代であり、漢詩文はかな文学開花の土壌ともなった。漢詩文の素養は、物語作者紫式部の「作為性」の源泉のひとつとも言える。

夕顔の人物形象には、「任氏伝」や「長恨歌」「長恨歌伝」に由来する漢詩文表現を確認することができる。これらは紫式部という物語作者の作為性の証と言える。一方で、三輪山型神婚譚や河原院説話といった伝承性も、夕顔の形象には欠くことはできない。むしろ伝承性による形象が夕顔の基層をなしていると言ってもよいだろう。その上で、古伝承を材源とするのみでは形象しきれなかった、愛する女の死と尽きせぬ男の追慕を描出するため、漢詩文を材源とした作為が行われたと言えるのである。

